

エコロジー

ecology

(毎週水曜日掲載)

日米欧などの国際チームが、海洋にいる生物の種と生息数を記録する、海の「国勢調査」作りに乗り出した。多様な生物種を守ろうという機運が高まっているが、地球上にとれたけの生物がいるのかという実態はつかめていない。なかでも地球上の七割を占める海洋での研究は遅れている。

(三井 誠)

海の生き物を国際調査

地球上の生物種数は、記録されているだけで約百八十万種に上り、未知の生物を含めると三百万種とも一億種とも推定されている。「生物多様性を守ると言っても、どんな生物がいるのかわからなければ、絶滅しても気付くもしないかもしれない」。京都大瀬戸臨海実験所(和歌山県白浜町)の白山義久所長は話す。白

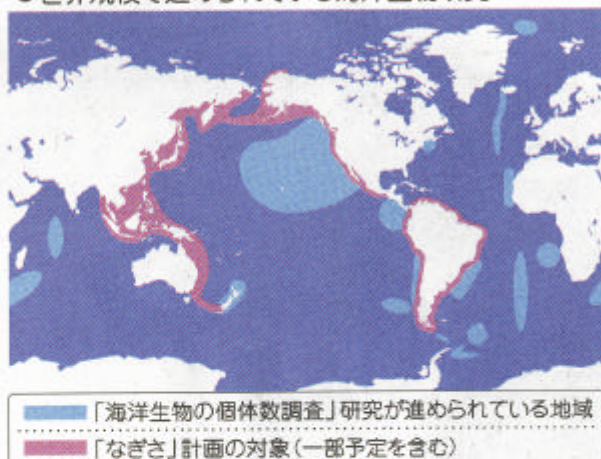
そうした危機感を背景に、日米欧などの国際チームが二〇〇〇年、「海洋生物の個体数調査」研究を始めた。十年計画で様々な研究が行われるなかで、白山さんがリーダーを務めるチームは、水深二十メートル以下の浅海域を調べている。名付けて「NAGISA(なぎさ)計画」。

「NAGISA(なぎさ)計画。なぎさは、岸辺で海藻を採ったり、魚を取ったり

に十三か国・地域が参加を表明している。南米諸国も意欲を見せているという。陸上で生物の多様性に富むのは熱帯雨林とされているが、海洋では、どのような条件の場所に多様性があるのか、はっきりしていない。今回の研究で、答えが見つかるかもしれない。

こうした生物多様性の理解に向けて、経済協力開発

●世界規模で進められている海洋生物研究



日米欧などのチーム

山さんが同実験所の前の浜辺の砂を調べたところ、ゴカイの仲間である動物動物の新種を四種も発見した。それまで日本では一種しか見つかっていなかった。

「身近な所を少し調べただけで続々と新種が出てくるほど、研究は進んでいない」と白山さん。目立たない地味な動物だが、生態系の貴重な一員にほかならない。

深さ二十メートルと五メートルの海底の砂や海藻、岩場に生える生物などを採取し、どこにどんな生物がいるかを明らかにする。対象は日本から東南アジア、オーストラリアへ至る海岸線、アメリカ西海岸などで、す

してきた日本ならではの言葉で、英語には当てはまる言葉がなく、プロジェクト名に採用されたという。

「なぎさ」研究では、水

機構(OECD)は海洋に限らず、すでに記録されている百八十万種の生物をデータベースにまとめる国際研究を進めている。



国内で見つかった体長0.3ミリほどの動物動物の新種。右に見えるのは支持棒(白山所長提供)

種と生息数を記録

確かに新種の発見も重要だが、すでに知られている種ですら、研究機関ごとのデータベースに情報が散在していて、全容が把握しにくいのが現実だ。データベースの国際研究では、まずはばらばらの情報を統一し、インターネット上に世界の「生物図鑑」を作る。

悩みの種は人材不足。二十世紀の生物学は、DNAなど生物に共通する仕組みを明かす研究がもてはやされた。地味な分類学には研究費もつかず、人材も育っていなかった。白山さんは「研究を進めながら人材育成に努めていくしかない」と話す。十九世紀には博物学として花形だった分類学が、生物多様性を重視する二十一世紀になって、再び脚光を浴びつつある。

海洋生物の個体数調査 海洋生物の多様性を明らかにする国際研究。太平洋北部などで七事業が進められている。「なぎさ」計画のほか、深海の生態系の調査、クジラの追跡調査などもある。米民間財団「スローン財団」が中心に支援。国内では環境省や日本学術振興会などが支えている。